

スラファ編『リカード全集』の刊行について

大野 精 三 郎

The Works and Correspondence of David Ricardo Edited by Piero Sraffa, with collaboration of M. H. Dobb. Volume I: On the Principles of Political Economy and Taxation. Volume II: Notes on Malthus's Principles of Political Economy. Volume III: Pamphlets and Papers, 1809—1811. Volume IV: Pamphlets and Papers, 1815—1823. Cambridge University Press, for the Royal Economic Society 1951—1952.

Sraffa 教授編集の『リカード全集』が、Dobb 教授の助力をえておよそ 20 年にわたる努力を結實させて刊行された。この全集が計畫されたのは 1925 年のことであるから、企畫と出版とのあいだには 25 年の歳月がかかっているわけである。この仕事は最初、Royal Economic Society によって 1925 年に計畫され、ついで 1930 年 J. M. Keynes の示唆で編集の責任が Cambridge 大學 Trinity College の P. Sraffa に委嘱され、爾來同氏の手によって作業が續けられた。第二次世界大戦による 5 年間の作業の中斷があつたが、48 年以降 Dobb が協力者として編集に参加し、とくに第 1, 第 2, 第 3, 第 6 卷の解説を擔當し、51 年にその全體の構成と原稿が完成したのである。この全集は最終的には 10 卷ないし 11 卷になると思われるが、豫告されたところによれば、第 5 卷以降はつぎのようになっている。Vol. V. Speeches and Evidence, Vol. VI. Letters, 1810—1815. Vol. VII. Letters, 1816—1818. Vol. VIII. Letters, 1819—June 1821 Vol. IX. Letters, July 1821—1823. これに A Volume of Biographical Miscellany, including Journal of a Tour on the Continent, and a General Index of the whole Work がつけくわえられることになっている。このうち第 5 卷まではすでに刊行され、第 9 卷までは本年中に刊行される豫定であるといわれている。しかし現在、わたくしは第 4 卷までしかみていないので、その範圍で、この全集の全體の概觀とその重要性をみておくことにする。この全集についてはすでに Austin Robinson が *Economic Journal* の 51 年 12 月號に、*London Times* はその Literary Supplement の 25 年 1 月 25 日號のほとんど 1 ページをさいて紹介をおこない、わが國でも『經濟評論』が 4 月號

に紹介しているので、重複をさけて簡単にふれておきたい。

この全集の特徴は、第一に、現在までに明らかにされた Ricardo の著作・書簡・手稿および言論活動を全部収録していることであり、Ricardo の著作・言論活動が集大成されたことである。これまで Ricardo の著作は、生前に出版・刊行されたものをのぞくと、全集に近い形では M^culloch と Gonner によって刊行されたものがあるにすぎない。M^culloch はその編集した『リカード著作集』(Ricardo's Works) に『政治經濟學原理』のほか、九つのパンフレット・論文をおさめて 1846 年に、Gonner は『原理』のリプリントを 1891 年に、『リカード論文集』(Economic Essays by David Ricardo) に五つのパンフレット・論文をおさめて 1923 年に、それぞれ刊行している。その後 Hollander によって Malthus の政治經濟學について Ricardo が批評したノートが発見され、Hollander-Gregory 編『マルサス評註』(Notes on Malthus's Principles of Political Economy) が 1928 年に刊行された。そのほか Ricardo の Malthus 宛書簡が Bonar によって 1887 年に、M^cCulloch 宛書簡が Hollander によって 1896 年に、Hutches Trower 宛書簡が Bonar および Hollander によって 1899 年に刊行され、ついで Hollander 編『金の價格を論じた三つの手紙』(Three Letters on the Price of Gold) が 1903 年に、同じく Hollander によって『貨幣問題小論文集』(Minor Papers on the Currency Question) が 1932 年に刊行されている。このように、Ricardo の著作・書簡・論文は、M^cCulloch, Gonner の全集以後、前世紀末から今世紀の 30 年代にかけて、逐次刊行されるに至っていた。このたびの全集は、

これまで発見・刊行された Ricardo の著作・書簡を全部収録しているだけでなく、Ricardo が議會でなした演説・証言までも議事録から採録し、この側面における Ricardo の活躍のあとを明らかにし、およそ Ricardo の書きかつ述べた全活動をすべて集大成している。しかしこの全集は、これまでの Ricardo の著作・書簡・言論活動を集大成するのみに終わっていない。Ricardo 経済學の理解にとって不可欠な重要な書簡、すなわち Malthus の Ricardo 宛書簡と Ricardo と James Mill との往復書簡および Ricardo 自身のいくたのノートおよび死の直前まで筆を執っていたと思われる未定稿の論文が、この全集が編集された時期に新たに発見され収録されていることである。このことが、この全集の第二の特徴と重要性を示している。Ricardo の経済學が Malthus との理論的對立によって、またのちに Ricardo 學派をかたちづかった人々とのあいだの討論または書簡による意見の交換から生まれ、發展したことは周知のことに屬し、それらの書簡が、寡作であった Ricardo の経済學の理解にきわめて重要な意味をもつが、こんどはじめて明らかになった Malthus の Ricardo 宛書簡および Ricardo—James Mill 往復書簡の発見は、Ricardo が『同一の原理を、いろいろの形で種々の人に、その發展のそれぞれの段階で提供したこと』(Vol. 1, General Preface i) を明らかにし、また Ricardo の著作のなかで、Malthus, James Mill などの人々のおこなった理論的貢獻をも明らかにすることであろう。第6—第9巻におさめられる書簡集には、從來發表されなかったものを半数以上ふくむ 555 通の書簡の収録される豫定であるといわれている (Vol. 1, General Preface ii)。

この全集の第三の特徴は、Ricardo の著作・書簡・言論の全活動を収録するさいに嚴密なテキスト・クリティクがおこなわれていることである。たとえば、これを Ricardo の最も重要な著作『政治經濟學原理』を例にとってみよう。この全集におさめられた『原理』は McCulloch, Gonner 版と同じく Ricardo の生前の最後の版である第3版(1823年)をテキストとしているが、McCulloch 版, Gonner 版とことなり、第1版(1817年)第2版(1819年)とのちがいはすべて明らかになるようになっている。とくに、第1版、第2版との相違のいちじるしい第1章 價值について(On Value)は、第1章の附録として第1版、第2版の大部分がおさめられているので、われわれは、第1版から第3版までの Ricardo の學說の變化をあとづけることができる。また巻末には第1版、第2版 McCulloch 版, Gonner 版 この全集版についてのページの對照表がつけられていて、利用の

便宜がはかられている。第2巻の『マルサス評註』は、上段に Malthus の原文と原ページがおさめられ、下段に、Malthus の原文とのあいだに罫線をひき、Ricardo の評註が Ricardo の寫した原文の最初の數語とともに、原文より大きな活字で組まれているので、Ricardo が Malthus の『政治經濟學原理』のどこを問題としているかが一目瞭然となっている。このような嚴密な校訂のうえに、編集者は Ricardo が参照したと思われる参考文献が明らかであるときはその書物名を、また Ricardo が他の個所でより詳細に述べているときは、それへの参照の注意をあたえていて間然するところがない。また歴史的事實の探究についても、編集者は、その力を盡している。第3巻は Ricardo の地金論争の論文をおさめており、Ricardo はそのなかで Bullion Committee の證人 Mr.— の証言に多く言及しており、この Mr.— は Cannan 教授によって Nathan Mayer Rothschild と推定され、それが定説となっていたが、Sraffa は、周到な調査によって、この Mr.— は、Hamburg の John Parish なることを明らかにしていることは、その適例というべきであろう。このような嚴密なテキスト・クリティクおよび調査によって、編集者はなによりもまず、Ricardo がなにをどのように書き、そしてそれをどのように訂正・發展したかを明らかにしようとするため、なんらかの意味での Ricardo 批評または解釋にわたる記述を極力排除している。各巻に付された編集者序言またはノートも、この態度を一貫して守りつづけ、序言またはノートの記述は Ricardo の著作が『生まれるに至った直接の誘因と、それが書かれた事情の記述にかぎられている』(Vol. 1, General Preface viii) このような眞剣な力のこもった編集部の態度を具體化したものは Cambridge 大學の出版部であった。Ricardo の書簡集は當初2巻におさめられる豫定で校了にまでなっていたところ、上述の Malthus の Ricardo 宛書簡 James Mill との往復書簡の発見は、その全部を組替える必要に迫られた。またそれらの書簡は、編集者の付した註にもあらわれているところよりみて、部分的なそれをふくめれば、組替えはほとんど全巻におよんでいる。Cambridge 大學出版部はこれらの困難な作業をおこなったばかりでなく、Notes on Malthus's... にみられるように、印刷技術上の困難を克服して、編集者の意圖を具體化している。このように、この全集には、これをつくりあげるために参加したあらゆる人々の眞剣な努力がにじみでている。

さて、このように嚴密に、しかも客觀的に集大成された『リカード全集』は、われわれになにを新らしく教

えているであろうか。とくにこれまで発表されなかった書簡および手稿の発見が、従來の Ricardo 研究および Ricardo 解釋をどれほど訂正するであろうか。これを全體的に論斷することは、現在その時期ではない。ここでは、二の氣づいた點を指摘するにとどめたい。この全集の刊行によって、第一に Ricardo の『原理』の執筆事情が明らかにされたことである。これまで『原理』は Ricardo が出版を豫定せず自分自身の目的のために書かれたものであることが、John Stuart Mill の『自叙傳』以來 Dunbar, Marshall などのとるところとなり學界の定説となっていた。しかし Ricardo—James Mill の書簡の発見は『いまやこの意見が根據のないものであり、公刊の意思が執筆の最初から Ricardo の胸中にあった——Ricardo はしばしば自分の目的を達成するみずからの能力に疑問をもったが——ことを明らかにしている』(Vol. 1 Introduction xx) ばかりでなく、『原理』の特殊な構造が、Ricardo の執筆の順序から理解されねばならぬことを示している。すなわち『原理』は Ricardo がみずからの思索のあとを追って、まず第一に、價值および地代・利潤・賃銀についての自己の理論を展開し、ついでそれらの理論の應用として租税について書き、第三に Smith, Malthus, Say などの理論と自分自身の理論とにちがうか、またそれらの理論はいかに批判されるべきかという論争的な部分を書きあげたという執筆の順序から理解されなければならない。これらを書きあげたのちに、敘述を章・節へわりふる仕事がおこなわれたことを、James Mill との往復書簡は明らかにしている。これにもとづき、解説者 Dobb 教授は『原理』の二つの部分、すなわち Ricardo 自身の經濟理論と租税論が Smith の Wealth of Nations の Book I と Book V の構成とおどろくべきほど類似していることを明らかにし、かつ『原理』第 1 版におけるいくつかの章の順序が重複していること (double numbering of chapters) についてもその執筆事情から正しい推定・解釋をおこなっている。従來『原理』はその構成が不統一であり、その點 De Quincy, Marx などの批判を蒙っていたのであるけれども、Dobb 教授は、新たらしい資料にもとづいて『原理』の構成を正しく明らかにしているように思われる。第二に、理論的に重要なことであるが、James Mill

との往復書簡の発見は『第 3 版の理論は、本質と力點において、第 1 版のそれと同一であるように思われる』(Vol. 1: Introduction xxxviii) ことを明らかにしている。この點にも關連することであるが、第三に、この全集に新たにおさめられた Ricardo の手稿によれば Ricardo が『原理』第 1 版刊行後、Torrens の批判によって、すでに『不變資本』と『可變資本』との區別に到達していることを示していることである。經濟學說上の通説によれば、Ricardo は、資本の有機的組成のいかんにかかわらず平均利潤率が成立する事態を、價值と生産價格とを同視したために説明することができず、Ricardo の『原理』の第 1 版から第 3 版への修正増補は Ricardo が労働價值説から生産費説への轉向を示すものとしてとりあつかわれてきた (たとえば Hollander, Cannan などの見解)。しかしこのたび明らかにされた Torrens の『原理』第 1 版の批評にたいする Ricardo 自身のノートによれば、かれは『固定資本』の定義を擴張し、『賃銀に分解しないものをのぞいて、生産に使われるすべてのもの (かくして賃銀のみを流動資本の唯一の源泉として残す)』をふくむように定義している。この定義はのちの Marx の『不變資本』のそれと合致している。このような觀念に到達した創始者たる名譽は、Marx. によって George Ramsay に歸せられているが、Ricardo はそれよりも早く、その觀念に到達したことを、このノートは明らかにしている。しかしそれにもかかわらず、Ricardo は『原理』の第 2 版においては、流通時間の遲速を基準とするかれ本來の固定・流通資本の區別にたちもどっている。これはなぜであるか、またかれの理論にとってどのようなことを意味するか、しかもまた第 1 版の理論の基調が第 3 版に至るまで變化なきものとみうるであろうか。全集におさめられた短いノートすらこのような問題を提起しているように思われる。第 4 卷には、Ricardo が死の直前まで筆をとっていた Absolute Value and Exchangeable Value と題する論文がふくまれている。

このように『リカード全集』は、Ricardo の著作・言論活動の單なる集大成を意味するばかりでなく、従來の Ricardo 研究に重要な、しかも新たらしい問題を提起しているように思われる。 (1952・5・13.)